



チャーリー
からの
電話

やうみ よいち
八海宵一

SF
短編

チャーリーからの電話

バイトから帰った敏文が湯を沸かし、晩飯のインスタントラーメンを準備していると、テーブルに置いていたスマートフォンが鳴り出した。

条件反射のようにディスプレイをのぞきこみ、出る必要のある相手か確認し、そして、首をかしげた。

\$ & % ★ ! △

着信相手の名前は文字化けしているのか、わけのわからない記号が表示されていた。

敏文は、しばらくためらったが、いつまでたっても鳴り止まないスマートフォンに覚悟を決め、トークボタンをプッシュした。

「もしもし」

「ああ、よかった、つながった。敏文さんですね？ 私はチャーリーと申します」

チャーリーと名乗る男の声は、とても流暢な日本語で自己紹介をした。だが、残念なことに敏文の友達のなかに、チャーリーはいなかった。

「いたずらなら、ほかでやってくれ」

敏文が切ろうとすると、チャーリーはあわてて懇願してきた。

「待ってください、いたずらと思われるのも無理ありませんが、私は正真正銘、あなたに用があって、こうして連絡しているのです。どうか私の言うことを聞いてください」

「新卒の勧誘かなにかだろうか？」

敏文は眉をひそめながら、たずねた。

「用ってなんのようだ？」

「はい——たいへん申し上げにくいのですが、その場でフラダンスを踊っていただけますか？」

「なんだって？」

「申し訳ありません」

チャーリーは本当に申し訳なさそうに謝った。きっと、頭をペコペコと下げているにちがいない。敏文は軽いめまいを覚えた。

「どうして、オレがフラダンスを踊らなきゃいけないんだ！」

「お怒りになるのは、ごもっともです。ですが、我々のいる未来を確定するのに、あなたのフラダンスが必要不可欠なのです」

チャーリーの説明に、敏文は重いめまいを覚えた。

「わかるように説明してくれ。できれば、の話だけどな」

「私は今、32世紀から、あなたに電話をしています——ああ、切らないで、本当です。本当に未来から電話しているのです。この32世紀の世界は、あなたがそこでフラダンスを踊ったために、決定されたのです」

「フラダンスで未来が決定する?!」

バカげた話に、敏文はあきれ返った。過去の出来事が未来に影響するのはわかるが、オレが今ここで、フラダンスを踊ったからといって、どんな影響があるっていうんだ。第一、素人のフラ

ダンスなんかで未来が決まっているのか？ コンテストかなにかで、踊るならまだしも、ほかに誰もいないワンルームで踊ってなんになる？

「不審に思われるのは当然ですが、32世紀の世界というのは、非常に移ろいやすい、不安定な世界なんです。過去のささいな出来事をきちんと起こしていかなければ、我々のいる未来が消えてしまうことだってあるのです」

「オレには関係ない」

敏文の冷徹な言葉に、11世紀はなれた相手は絶句したようだった。しばらく、沈黙が続いたあと、チャーリーがつとめて冷静にいった。

「そうおっしゃる気持ちもわかりますが、しかし、今、フラダンスをしていただかないと、私はもちろん、私の妻や子供たちがいない未来が選択されてしまうんです。お願いします。お願いしますから、いま、フラダンスを踊ってください」

最後のほうの声が震えていた。もしかして、泣いているのだろうか？

えらく手のこんだいたずらだ。

そう、いたずら……のはずだ。でも、もしちがっていたら、チャーリーは消えてしまうかもしれない。仮に、万一、百歩譲って、ありえない話だが……。

「……わかったよ、踊ればいいんだろ、踊れば！」

「おお！ 踊っていただけますか！」

チャーリーは心底うれしそうな声をあげた。それを聞いた敏文は、なかばやけくそになりながら、ワンルームの狭い台所で、フラダンスを踊った。なんの変化も手ごたえもないまま、2分間踊った。

「これでいいんだろ！」

テレ隠しに大声で怒鳴ると、チャーリーは大満足だった。

「ありがとうございました」

チャーリーは感謝の言葉を述べ、何事もなかったかのように電話を切った。

「え？ ちょ、ちょっと待てよ！ それだけかよ?!」

取り残された敏文はスマートフォンにむかって叫んだが、なんの返事も返ってこなかった。

しばらく、ぼんやりしていると、ケトルがピーピーと鳴りだし、湯が沸いたことを報せてきた。

。

*

チャーリーからの電話は、その後、ときどきかかってくるようになった。

「もしもし、チャーリーです」

彼はいつもこういったあと、鼻をつまんでください、だとか、左足を30秒間上げてください、だとか、どうでもいいようなお願いをしてきた。敏文もあまりにどうでもいい頼みごとなので、断るのも面倒くさく、鼻をつまみ、左足を30秒間上げた。

その度に、チャーリーはうれしそうな声で、感謝し、電話を切った。たまに時間があるときは

世間話をすることもあった。

そんなやり取りを何度かしているうちに、お互い、慣れてきてしまったのかもしれない。

夜勤明けのバイトから帰ってきた敏文が、着替えもせずに布団のなかに沈みこむと、同時に、スマートフォンがなりだした。

「もしもし、チャーリーです」

「……だと、思ったよ」

敏文が不機嫌な声でいう。

「申し訳ないのですが、冷蔵庫のなかの缶ビールを一本だけ飲んでください」

「いやだ」

敏文は、はっきりと断った。

「しかし、それでは――」

「オレは今すぐ寝るんだ。もう冷蔵庫までいく気はない……むにゃむにゃ」

「そ、そんな！ それじゃあ、私たちの世界が――」

チャーリーの話はまだ続いていたが、敏文は反射的に通話を切った。

そして、そのまま、眠りこんだ。

そのあと、スマートフォンは何度か鳴っていたが、――やがて、鳴らなくなった。

*

翌日、未来からの電話はかかってこなかった。

敏文はなんだか薄気味の悪い感じをおぼえながらも、どうすることもできず、頻繁にスマートフォンを見る癖だけがついた。

かかってきたときは気味の悪い電話だったが、急にかかってこなくなるのも、気持ち悪い。なんだかんだ言いながら、この数日間、毎日チャーリーとはいろんな話をしてきた。奥さんが美人で二児のパパだということも聞いたし、釣りが趣味で今週末出かける予定なのも聞いた。久々の海釣り、ルアーの話を楽しそうにしてた。なんていうか、彼の人懐っこい性格は、嫌いじゃなかった。

昨日も猛烈な睡魔さえなければ、彼の願いを間違いなく聞いていただろう。そう、チャーリーのお願いは、本当にささいなことばかりだった。

敏文は、バラエティ番組を見ながら、昨日、飲まなかった缶ビールに口をつけた。いまさらだが、飲めばなにかが起るような気がした。

しばらくして、スマートフォンが鳴り出した。

相手の名前は文字化けしていた。

チャーリーだ。

敏文は少し安堵し、電話にでた。

「なにしてたんだよ、チャーリー、心配したぞ」

だが、電話の相手はチャーリーじゃなかった。

「もしもし、私はクロカワといいます」

「クロカワ？ チャーリーはどうしたんだ？」

敏文の質問に相手は、困惑しているようだった。

「チャーリーというのは、誰のことですか？こちらにはそのような名前の人間はおりませんが……」

「だって、32世紀から電話をかけてるんだろう？ だったら、いつもチャーリーがかけてたじゃないか」

電話の相手は、しばらく沈黙したあと、たずねてきた。

「私がどうして、32世紀から電話していると知っているんですか？」

「だって、それはチャーリーが教えてくれたから……」

「チャーリーはあなたに、いろいろつまらないお願いをしましたか？」

敏文はうなずき、その通りだと答えた。クロカワはふう、と大きなため息をついた。

「あなたはチャーリーのお願いを聞かなかったのですね？」

確信をついた言葉に、敏文は反抗した。

「ちがう！ 聞かなかったわけじゃない、あれは不可抗力だ！」

「落ち着いてください。べつにあなたを攻めるつもりはありません」

クロカワは実に落ち着いた声でいった。

「むしろ、あなたのその行いに感謝しているくらいです。どうやら、今、32世紀は、そのチャーリーのいる世界から、我々のいる世界を選択したようです」

「なんだって?! どういうことだ？」

「説明の前に」

クロカワはわざとらしく、言葉を区切っていった。

「右手で頭をかいてください。話はそれからです」

「わかった」

敏文は別にかゆくもない頭を、二回かいた。

「大変結構です」

クロカワの満足そうな声が聞こえた。

「そんなことはどうでもいい、我々の世界ってどういうことだ？ お前の世界にチャーリーはいないのか？」

矢継ぎ早にたずねる敏文に、クロカワは、こほん、と咳払いをひとつした。

「チャーリーという名の人物は、大勢います。しかし、時間管理局にチャーリーという男は存在しません。こうして、あなたに電話をかけられるのは、時間管理局の限られた人間だけですから、あなたの言っているチャーリーはこの世に存在しません」

「どうして、そんなことになるんだ！」

「それは……32世紀という世界が非常に不安定だからです。過去の行動によって、決定される世界が異なるのです。我々の世界はあまりに多くの可能性があり、パラレルワールドの世界が現実の世界として、決定してしまうのです。あなたが昨日、チャーリーのお願いを無視すること

によって、チャーリーの世界は存在するための条件を満たすことができず、私たちの世界が採用されたようです」

「そ、そんな……」

一瞬にして、世界ごと消え去ったチャーリーのことを考え、敏文はなんだか妙な気持ちになった。どうしても、現実として受け入れられない感じがした。

缶ビール的一本で未来が本当に変わるってのか？

「じゃ、じゃあ、昨日、もしオレがビールを飲んでいれば……」

「チャーリーの世界は続いていたでしょうね」

クロカワはきっぱりと断言した。

「だったら、昨日のオレに電話してくれ、缶ビールを飲むように言うんだ！」

「そんなことをすれば、私が消えてしまいます。第一、一度決定した過去を変えることはルールに反します」

時間管理局がどんなルールに則っているのか、そんなことはどうでもいい。敏文は、なんとかしてチャーリーの世界を取り戻したかった。昨日、睡魔に勝てなかったばかりに消えてしまったチャーリーをそのままにしておくのは、どうしても、寝覚めが悪かった。

「おれはチャーリーを取り戻すぞ」

クロカワは電話の向こうで、少し呆れているようだった。

「どうやって、取り戻すんですか？ あなたは過去に干渉できないんですよ？」

「どうにかして、やってやる！」

敏文にも、その方法は分からなかったが、怒鳴るだけ怒鳴り、電話を切った。

大きな深呼吸を一つして、それから、スマートフォンをいたずらにプッシュしてみた。

でたらめにかければ、もしかしたら、過去につながるかもしれないかと思ったが、当然のことながら、電話にそんな機能はなかった。

クロカワの言うとおりに、敏文は過去に干渉できない。あのとき、睡魔に負けたバカな自分に忠告することができれば、未来を変えることができるというのに……。

ん？ 待てよ。

敏文の頭の中で、なにかがひらめいた。

そう、確かに過去へ干渉することはできない。

だが、未来への干渉はどうだ？

*

「もしもし、クロカワです。早速ですが、息を20秒止めてください」

敏文は、すーはーすーはー深呼吸をした。

クロカワのいる32世紀は採用されなかった。

「もしもし、私、ウェイいます。あなたにお願いあります。瞬きを3回してください」

敏文は、瞬きを10回以上した。

ウェイのいる32世紀は採用されなかった。

「もしもし、ハンスです。三遍回って、ワンといってください」

逆立ちして、ガオーと吼えた。

「もしもし、ウェリントンといいまー」

敏文は、ことごとく32世紀からの注文を無視した。

なんども、なんども……。

＊

「もしもし、チャーリーです」

聞き覚えのある声だった。

敏文は、なんども未来を変えることで、とうとうチャーリーのいる世界を引き当てた。

無数にあるパラレルワールドの中から、チャーリーのいる未来に変えるまで、思ったほど時間はかからなかった。

チャーリーは、いつもどおりお願いをしてきた。

「右の耳をつまんでください」

「やあ、チャーリー」

敏文は楽しそうに、呼びかけた。

「クロカワと代わってくれないか？」

その言葉にチャーリーは躊躇した。

「クロカワ？ 誰のことですか？」

敏文は、左の耳をつまんだ。

チャーリーの32世紀は採用されなかった。

＊

「おかげで32世紀は、メチャクチャですよ、敏文！」

チャーリーが抗議の電話をかけてきた。

「やあ、チャーリー久しぶり」

敏文は懐かしそうにいった。今回の世界を引き当てるには、少々時間がかかっていた。

「そのようすだと、クロカワもずいぶん怒ってるだろうな」

「当然です！ 未来をなんだと思ってるんですか！」

後ろのほうで、これまた聞きなれたクロカワの声が敏文を非難していた。

ウェイも、ハンスも、ワーワー言っている。

「しかたないだろ、お前らが全員いる世界ってのは、確率的にずいぶん低いみたいなんだから」

「あなたがあまりに未来をかき回すので、パラレルワールドの一部が崩壊してしまったんですよ。いったい、どうしてくれるんですか！」

「32世紀はそうなる運命だったんだよ」

敏文は平然と言ってのけた。チャーリーはため息をひとつした。

「おかげで海釣りには行けそうにありません。この世界を安定させるには、かなりの修正が必要になるでしょうから……休日出勤は確定です」

「また、変えてやろうか？」

敏文が言うと、32世紀から非難の塊が1ダース飛んできた。

「冗談だよ、冗談」

「あなたなら、本当にやりかねない」

「なあ、チャーリー」

「……なんですか？」

敏文の口調が改まったので、チャーリーは怪訝そうに訊ねた。

「その世界がダメなときは言ってくれ、いくらでも未来は変えられるから」

「ありがとう、でも、私たちは、あなたの選んでくれた未来に満足しています。だから、そんな心配は必要ありません……むしろ、確定し続けてもらえるかどうかのほうが、心配です。ああ、そうだ、今この未来を確定するために、すいませんが、うれしそうに笑ってくださいますか？」

聞きなれたチャーリーの注文に、敏文は答えた。

「ああ、大丈夫。それならさっきから、ずっとやってる」

<了>

チャーリーからの電話

<http://p.booklog.jp/book/44127>

著者：八海宵一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yaumiyoiti/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44127>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44127>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.